

守るために巧みに食草を利用して昆虫さえあります。ハムシの仲間には決まった植物しか食べないものが多く、ウリハムシ・イタドリハムシ・ヤナギハムシ・ヨモギハムシなど、その食草から名前のついた種類が沢山あります。

雑食の代表は何といってもゴキブリでしょう。家にすみつくゴキブリ類は人間の食べるものなら何でも食べてしまいそうです。この他にも動物の糞を食べる食糞性の昆虫や、寄生生活をする昆虫など、変わった食性のあるものを取り上げたらきりがありません。

私の務める昆虫館では七〇種類程の昆虫を飼育展示

家庭科から見た「食」

橋本 都

していますが、すべての昆虫の好む餌を用意することは大変なので、新鮮な植物を餌にする昆虫以外は代用食を考えて与えています。一番多くの種類に利用しているのがリンゴです。その他豚肉・ニボシ・固型飼料などを必要に応じて与えています。昆虫を飼育するにはその食物を知ることから始めなければなりません。

最近、地球規模の環境破壊が問題にされていますが、地球が酸素のない無機質な星にならない限り、昆虫たちはいつまでも生き続けて行くことでしょう。

(豊島園昆虫館)

現在、高校生たちは、どのような食生活をおくっているのだろうか。私は家庭科教師としてクラス担任として高校生と接してきたが、高校生の食生活も、社会の様相とあいまって大きく変化し、いろいろな問題を内包しているようにみえる。

食生活の授業では、まず自分の食事に注目させてみる。「昨夜食べたものをノートに書き、栄養診断する」という課題にも、食べたものを思い出せる生徒は少なくなっている。いつも食べているのに、その食品の名を知らないなど食事への関心も薄い。また食べていないという生徒は朝食も抜いたりする。

食事の時間も、家族と共にということはなくなっている。高校生の下校時間は様々で、部活動で遅くなり、帰りがけにジュースや袋菓子を食べ、九時過ぎにやっと食事となる生徒もいる。急激な運動のあとにアイスクリームや飲物をとるものだから、結局家では、夕食をきちんと食べられない。夜遅くなってからインスタントめんやポテトチップの類をとり、朝は食

欲がないという繰り返しである。

また、最近では、下校途中の駅でパンやおにぎりをほおばって空腹をしのぎ、塾へ直行する者も多い。

一週間ほど食事記録をつけさせてみると、その粗末な内容に驚くばかりである。ファーストフードや菓子などで辛うじてカロリーを維持している有様である。

さらに痩せたいために異常なほどの食事制限を試みたり、太りたくても太れず貧血で半年も月経がなくなっている生徒もいるなど、ただ単に食べることだけでは片付かない問題を感じている。

調理実習や調理実験は大抵の生徒が好きである。しかし、実習は張りきってやるのに、いざ試食となると、肉も魚も卵も、人参もネギもほとんどの野菜も嫌いで、毎日何を食べて生きているのだろうと思われる生徒もいる。

手作りの本物の味と化学調味料を使った加工食品の味と味覚テストをすると、加工食品をおいしいとするものが年々多くなっているようで、家庭科教師として

虚しい気持ちになる。

従来、日本人は「食」を大切にしてきた。家族揃って母親らの手料理を食べることが、家庭そのものを形成していく大きな要素であった。その味はその家ならではの味であろし、食事作りは家族への愛情に支えられた行為であったろう。

それが今や、家族の生活時間がバラバラで「食」についての価値観も多様となり、食事は単なる飢えを満たすものになっているのではないだろうか。

授業をすすめていくうち、生徒もやはりこのままではいけないと思ってきたようである。

夏休みに、自分で食事を作るという課題を出した。調理実習の時、いつも包丁の扱いにハラハラさせられる生徒がいたが、その生徒の母親は、はじめて子どもがいかにできないかを知ったという。そして共に台所に立つことで親子の対話も増え、家族全体の食べることについての関心も高まったという。

私たちは「食」の問題を単に栄養や空腹を満たすと

いうことではなく、家族の結びつきという点で見直すことが大切ではないか。例え、家族が共に食事ができなくとも、家族の食生活に関心を持ち、工夫していくことは、身体的な健康ばかりではなく、心の健康にもつながるものではないかと考えている。

(青森県教育庁)

